

〈資 料〉

## 〈安川悪斗〉の流血の彼方

—プロレス・リアル [1]—

Meaning of Blood Shedded by “Akuto YASUKAWA” : Reality of “professional wrestling” [1]

諸井克英  
(Katsuhide MOROI)

### はじめに

わが国で「プロレス」といえば、〈力道山〉(’24年生～’63年没)、〈ジャイアント馬場〉(’38年生～’99年没)、〈アントニオ猪木〉(’43年生～)を多くの者が想起するだろう。その〈力道山〉がプロ野球や大相撲と並ぶエンターテインメントとして確立した「プロレス」は必ずしもその後も継続的に順風だったわけではない。とりわけ、①〈猪木〉が試みた異格闘技路線や彼の金銭スキャンダルや、②〈馬場〉の逝去などを大きな契機として2000年代に入ると大きな混迷期に入った。しかしながら、今や「プロレス」は、「男」のエンターテインメントから脱皮し、女性観戦者の圧倒的な増加を大きな背景として新たなエンターテインメントの様相を示している。とりわけ〔新日本プロレス〕がそのブームを牽引しており、隆盛時には常設会場であった「大阪城ホール大会」(’15年7月5日)を満員札止め(1万4千人)にした(週プロ, 2015(7. 22))。この成功は観戦者の多様化にあることは言うまでもない(性別と年代; 現場観察)。ちなみに、「プロレスに魅せられた女子」を指す「プ女子」という言葉は流行語にもなり、制服を着た女子中学生をマンガ化して種々のプロレス技を解説する本(広く、, 2014)まで現れた。また、実際にリングで活躍する大卒女子レスラーたちのインタビュー本も出版された(泉井・山近, 2013; ちなみに後述する〈宝城カイリ〉(’88年～)もこの本に登場するが、法政大学・日本文学科出身である)。これらは「プロレス」観戦者の多様化と連動していると言えよう。

そのような状況の中で、今のブームを創造した貢献者

の一人でもある〈棚橋弘志〉(’76年生～)は、「プロレスは3カウントを取り合う競技で、危険な技の連続で盛り上げる『気絶大会』ではない」(棚橋, 2014)という持論に基づき、『週刊プロレス』(週プロ, 2015(3. 18) a)誌上で前号(2015(3. 11))の表紙について異色ともいえる批判を加えた。その表紙には鼻から出血し腫れぼったい顔となった女子プロレスラーの「凄惨な姿」が掲載されていたからである。本稿は、この「凄惨な姿」の意味を探る試みである。Barthes(1957)は、フランスの文化や慣習に哲学的考察を加えた著述の中で、「プロレス」についても触れ(翻訳ではレスリングという用語が使用されているが「プロレス」を指している)、「苦悩、敗北、そして正義の偉大な見物」として意義づけた。つまり、「プロレス」はスポーツとしての「アマチュア・レスリング」とは別物であるという前提は、このBarthesの哲学的着眼によっている。

### 何が起きたのか

’15年2月22日〔スターダム(STARDOM)〕の「後楽園ホール大会」で「事件」は起きた。当時のメイン・イベントとである「ワールド・オブ・スターダム選手権」王者〈世IV虎〉(’93年生～)と挑戦者〈安川悪斗〉(’86年生～)の試合は、「エルボー」を不意に見舞ってきた〈悪斗〉に対して〈世IV虎〉は「ベアナックルによるパンチ」を〈悪斗〉の顔面に打ち込み続けた。明らかに一線を越えた事態に〈悪斗〉のセコンドについていた〈木村響子〉(’77年生～)がタオルを投入し、試合は一旦〈世IV虎〉のTKO勝ちとなった。〈悪斗〉は、鼻からの大出血に加え、顔面を腫れぼったく変形させた。この凄惨な顔は『週刊プロレス』誌の表紙として試合を観戦していない者にも衝撃を与えた。「事件」の重大さか

ら、〔スターダム〕社長の〈ロッキー小川（小川宏）〉（'57生〜）は、即座にこの試合を無効とし、〈世IV虎〉の王座剥奪と無期限出場停止を宣言した（週プロ、2015（3. 11）a・b）。「プロレス」ファンの多くは、'87年「後楽園ホール大会」（〔新日本プロレス〕）で〈前田日明〉（'59年生〜）が〈長州力〉（'51年生〜）に顔面キックを浴びせ「眼底打撲」を負わせた「事件」を想起した（〈前田〉は〔新日本プロレス〕により無期限出場停止処分、その後解雇）。しかしながら、「事件」の構造は同型ではない。この「顔面襲撃事件」が起きた歴史的背景は、塩澤（2009）に詳しいが、「真のプロレス」を巡る〔新日本プロレス〕の漂流を「地」として「前田」と「長州」の心理的確執が「図」として浮き彫りになっているのだ。

### 「事件」の背景と顛末

事件の数日後に（2月25日）、〈ロッキー〉は、〈世IV虎〉とともに記者会見に望み、〈悪斗〉の容体（頬骨・鼻骨・左眼窩底の骨折と両眼の網膜振盪症）を報告し、同席した〈世IV虎〉が謝罪した（週プロ、2015（3. 18）b）。その際、今後の改善策として次の3点が発表された。①顔面パンチの禁止、②本部席へのリング・ドクター配置、③人間関係の歪み防止のために〈宝城〉を選手会長とし選手間のコミュニケーション円滑化。②については、確かに、「事件」直後の「大阪・城東区民ホール大会」（3月22日、現場観察）では、地元の医者と看護師が配置されていた。偶然にも、〈宝城〉と〈岩谷麻優〉（'93年〜）が試合中に接触した時に「宝城」の右眼下部から流血し、試合はドクター・ストップとなった（週プロ1786号の表紙は絆創膏を貼った〈宝城〉が飾っている）。この流血に観客は一瞬のうちに「ひいた」雰囲気になった（現場観察）。確かに後述する〈棚橋〉の主張と一致し、「流血」は少なくとも〔スターダム〕の観客には望まれていないのである。しかし、その後的大阪地区の大会では医療スタッフは配置されていない（5月10日「大阪・西区民センター」以後の大会；現場観察）。

〈ロッキー〉による処分発表後、入院中の〈悪斗〉のもとに〈ロッキー〉とともに謝罪に来た〈世IV虎〉、それを「受容」し〈世IV虎〉の今後を心配する〈悪斗〉という構図が描かれた（週プロ、2015（3. 18）b）。〔スターダム〕のエースである〈紫雷イオ〉（'90年生〜）は「世IV虎にリングに立ってほしい・・・これでプロレスを辞めたら絶対にダメだ」と発言することによって、両者の均衡化をはかった（週プロ、2015（3. 25）a）。

〈世IV虎〉は、6月14日「後楽園ホール大会」に現れリング上で〔スターダム〕引退を宣言した（週プロ、2015（7. 11）。「自分はプロレスに救ってもらって、今の自分がある・・・」と述べる中、〈紫雷〉などがリング上に駆け上がり、引退撤回を期待するファン達の大声援が起こるが、予定されていた「10カウント」も鳴ることなく〈世IV虎〉はリングを去った。他方、〈悪斗〉のほうは、'15年7月28日に9月23日「〔スターダム〕後楽園ホール大会」での復帰が正式に発表された（<http://www.stardom.com/?news>）。〈悪斗〉は数試合前からリング周りの仕事やセカンドなどを懸命にこなしており、リング上での挨拶も行っていた（7月19日大阪・世界館大会、現場観察）。結局、〈悪斗〉は、〈木村〉とともに9月23日に復活し、「肉体改造」の成果を誇示した（週プロ、2015（10. 14））。しかしながら、悪斗は、12月1日に左眼窩底骨折による視力低下を理由として12月23日「後楽園ホール大会」を最後に引退することを発表した（週プロ、2015（12. 23））

### 「事件」に対する批判

先述した〈棚橋〉は、「週刊プロレスの表紙」が「世間とプロレスをつなぐ数少ない接点」として機能しているという前提で、「この女性（＝〈悪斗〉）が顔を腫らして血だらけになった」写真を表紙にする必要があるのかと『週刊プロレス』誌側を批判した（週プロ、2015（3. 18）a）。「プロレスの注目度がちょっとずつ上がっている段階」で凄惨な写真によって「プロレス界に近づいてきている人たちが離れてしまうという、現在のブームをもたらした貢献者の一人ならではの視点である。そもそも「試合内容が未熟であるだけ」という彼の「事件」の捉え方が根底にある。〈棚橋〉による『週刊プロレス』誌批判を受けて、『週刊プロレス』誌は、この「事件」に関する「短期集中連載」を行い、以下の4人が登場した。

女子プロレス・レジェンドの一人である〈長与千種〉（'64年生〜）は、この「事件」について「喧嘩両成敗」的観点に立った（週プロ、2015（3. 25）b）。「事件」前の二者の対人的過程に問題があるとすれば、「火種はボヤで済ませなきゃ」と誰かが解決すべきだと主張した。そして〈世IV虎〉にはしばらく第1試合に出続けるか、「リング周りのことを走って走ってやらせればいい」のであり、その上で、〈悪斗〉復帰時にもう一度闘い、観客に「勉強させて頂きました」と詫げることを提案した。

レフェリーとして「事件」当事者であった〈和田京

平) ('54年生～)は、次の2点を指摘した(週プロ, 2015(4.1)a)。<sup>①</sup>〈世IV虎〉のチャンピオンとしての「品格」の欠如と未熟さ、<sup>②</sup>当該試合でのレフェリー(自分自身)権限の曖昧さ。<sup>①</sup>は、〈悪斗〉が仕掛けたパンチに対する過度の報復パンチのことであり、「レスラーはケガしたら二流、ケガさせたら三流」ということである。<sup>②</sup>は、40年にわたって('74年レフェリー・デビュー)メジャー・プロレス団体でレフェリーの座にあるのになぜこのような事態を招いたのかということに関わる。〈和田〉は、〈悪斗〉が流血しても「やらせてください!」と発言する中で、リング・ドクター不在のために「ドクターストップ」を行使できないことや、自団体でないのに数分で試合中止にしてよいのかという営業的判断が働いてしまったことを告白した。さらに、根本問題として、自団体でないがために自分と二選手との信頼関係が確立されてなかったことも挙げた。

ベテラン・レスラーの〈里村明衣子〉('79年生～)は、レスラーの育成上の問題点に注目した(週プロ, 2015(4.8))。「ケガをさせようとして人を殴るんだったらプロじゃない」ことを徹底的に教え込むことが新人育成にとって重要であり、団体内の人間関係の歪みに関する日常的把握の必要性も指摘した。その上で、〈世IV虎〉の真面目さを認め(「あの子は本当に真面目だし、真っすぐだから」)、再教育の上でのリングへの復帰を提言した。

「プロレス界の帝王」とも呼ばれる男子プロレスラー〈高山善廣〉('66年生～)は、「被害者」である〈悪斗〉の未熟さを問題視した(週刊プロ, 2015(4.15))。「打撃をよける術」も知らずに「粋がっていきなりパンチ」した〈悪斗〉には「やったらやられるという覚悟」がないから、今回の「事件」は〈悪斗〉自身が招いたのだ。そのような未熟な〈悪斗〉をメイン・イベンターに仕立てた〔スターダム〕の組織上の未熟さにも言及した。

〔スターダム〕旗揚げ時('11年)から在籍し、現在は引退した('13年)〈愛川ゆず季〉('83年生～)は、「悪斗がスターダムの中で浮いている」という団体内の噂を前提に、当日の試合前から危惧を抱いていたことを訴えた。また、先述の〈棚橋〉による「未熟さ」批判に同意しながらも、先輩選手による「一生懸命の方向」のずれを補整する必要性を強調した。〈愛川〉が引退する前の対〈里村〉戦の逸話の開示は示唆的である。自分(〈愛川〉)は「思い切りキック」しているのに〈里村〉は自分が蹴った「1ミリ上の力でずっとやり返し」てきたのである。

## 〈悪斗〉と〈世IV虎〉との間の力学

「事件」が起こる1ヵ月前に、〈悪斗〉は、持病の「パセドウ病」の悪化で返上していた「ワンダー・オブ・スターダム選手権」を1月18日「後楽園ホール大会」で奪還した(週プロ, 2015(2.4))。その際、〈木村〉をリーダーとする《モンスター軍》に合流し《大江戸隊》を結成した。ここに〈宝城〉、〈紫雷イオ〉をそれぞれリーダーとする《昭和軍》、《平成軍》とともに《大江戸隊》が加えられ、3軍体制になった。〈ロッキー〉は、団体内に複数の対立集団を形成することにより団体の活性化を行ったのだ。これは、「プロレス」団体の伝統的手法でもある。他方、〈世IV虎〉も同日の大会で〔スターダム〕旗揚げメンバーである〈高橋奈苗〉('78年生～)を破り「ワールド・オブ・スターダム」選手権を防衛した。〈世IV虎〉は《平成軍》に所属していたので、「事件」となった試合は、《平成軍》と《大江戸隊》の闘いでもあった。

しかし、それ以上に、〈悪斗〉と〈世IV虎〉の関係性は特異である。先に記したように〈悪斗〉のほうが〈世IV虎〉よりも7歳年上であるが、デビューは〈世IV虎〉('11年1月)のほうが〈悪斗〉('12年2月)より早く、さらに〈悪斗〉は持病手術のため'14年に長期欠場した(週刊プロ, 2014(12.6))。

最も重要なことであるが、二者の「プロレス」に対する志向性の違いは決定的である。〈世IV虎〉は、小学3年時に両親の離婚に伴い母親と暮らすことになった(週プロ, 2015(1.21))。小学時代には母親の縁で〈風香〉('84年生～;〔スターダム〕旗揚げメンバー、現GM)と巡り会いプロレスに関心をもった。後の〔スターダム〕入門の下地が形成されたのである。しかし、進学した地元中学は荒れており、ワルの上級生にすぐに目をつけられ、ヤンキー・グループの一員となった。何度も補導されたあげく、最終的には少年鑑別所に入所となるが、保護観察処分となった。中学卒業後は内装職人として働いた。携帯で偶然〈風香〉のブログを知り連絡すると、〔スターダム〕旗揚げ前の彼女から「プロレス」への誘いがあり、現在の状況につながることになる。つまり、「プロレスは天職」という運命的思いである。「プロレス」は、「母をとてつもなく悲しませてしまった過去」への「恩返し」ができる職業として〈世IV虎〉は捉えていた。

他方、〈悪斗〉は日本映画学校の卒業生であり、もともと俳優志向なのだ。『東京タワー』('07年)や『デスノート』('06年)など、多くの映画やドラマに出演歴

がある。さらに、中学時代のいじめ、レイプ、自殺未遂などの自体験を素材にした自伝的映画『がむしゃら』の製作にも取り組んだ（15年3月完成；<http://www.maxam.jp/gamushara/>）。先述した〈愛川〉はもともとグラビア・アイドルから「プロレス」デビューしたが、先述した〈愛川〉との舞台共演がきっかけで〈悪斗〉もプロレスを志向することになった。

「プロレス」は、〈世IV虎〉にとっては困難な少女時代の果てに辿り着いた「天職」であったのに対して、「悪斗」には映画や舞台と同水準の「自己表現の場」に過ぎなかったと推察できる（先述したように、リング周りの仕事に励んでいた〈悪斗〉も、映画に伴うトーク・ショー準備のためか（<http://www.maxam.jp/gamushara/>）、9月6日「大阪・港区民センター大会」に同行していない；現場観察）。〔スターダム〕が人生の心理的居場所（諸井ら（2015）参照）となっていた〈世IV虎〉にとっては、そのような〈悪斗〉に対しては違和感と怒りが深く生じていたのかもしれない。

### 「事件」はなぜ起きたのか

スポーツ社会学者である Thompson（1991）は、Goffman（1959）によるフレーム分析に沿って「プロレス」の位置づけを試みた。Thompson によれば、「プロレス」とは「本当の喧嘩」（基礎フレーム）を単純に「偽造」した「八百長」ではなく、観客を含めすべての関与者が認めている「偽造」と「転形」との積み重ねである。例えば、「ドラマ」は台本の存在を前提とし、その台本通りの事態が進行する。しかし、「プロレス」ではその台本の存在に関する観客による推測を覆すことにより（フレームの破壊）「プロレスの凄み」を観客に経験させる。つまり、「プロレス学」を提唱した岡村（1991）が指摘するように、「プロレス」は「テーマとエンディングだけが決まっていることが多い」「ジャズのアドリブ演奏」と同型ともいえる。ところで、以上の Thompson の出発点は「本当の喧嘩」にあるが、入不二（2009）は彼の分析を哲学的に批判し、「イマジナリな無限定な喧嘩そのもの」を原点にすべきとした。

ここでは、今述べたような「プロレス」に関する枠組みに沿って、〈世IV虎〉と〈悪斗〉による「事件」を分析しよう。〈悪斗〉は最初は先制「エルボー」により当該の試合を「本当の喧嘩」として「フレームの破壊」を企てた。この企てが当該の試合に関するおおよその進行に関する事前取り決めとも言える「ブック」に含まれていたかは当然ながら不明である（〈ロッキー〉が告白すれば明らかになるが）。しかし、俳優というもう1つの

「顔」をもつ「悪斗」からすればこの試合を盛り上げるための当然の思いつきとも解釈できる。彼女の思いつきは、当該試合以前の中で醸成されたリング外でのストーリーの展開である「アングル」と一致する。問題は、この企ての根底に、〈愛川〉が指摘する「スターダムの中で浮いている」という感覚や、〈里村〉が感じた「日常関係の歪み」に起因する〈世IV虎〉に対する恐怖があった可能性が推測できることである。つまり、少女時代に「本当の喧嘩」を経験し、挙げ句に鑑別所まで行った〈世IV虎〉相手なのである。〈悪斗〉の企ては、〈高山〉が言う「覚悟」の域を前提としたものではないと想像できよう。

他方、〈世IV虎〉は、〈悪斗〉による「フレームの破壊」に「本当の喧嘩」として応答した。「プロレス」と「本当の喧嘩」との間に横たわる境界が消失したのだ。この原因の1つには、〈世IV虎〉にとっては少女時代に経験した「本当の喧嘩」とリング上での「喧嘩」の区別がもともと曖昧であり、これは〈里村〉や〈高山〉がともに触れた〔スターダム〕の新人育成の問題に帰着する。さらに、もう1つの重要な原因として、次のことが推測される。〈世IV虎〉がようやく辿り着いた「プロレス」への想いは、俳優としての自己実現のためにその「プロレス」という場を利用しているかのように見える〈悪斗〉への「憎悪」を同時に生み出した。当該の試合前から日常的に醸成されていたと思われる、この「憎悪」が〈悪斗〉の「エルボー」によって〈世IV虎〉の側に「本当の喧嘩」を誘発したのだ。〈愛川〉の「1ミリ上の力でのやり返し」や〈和田〉の「けがをさせたら三流」という規範意識にこの「憎悪」が圧倒的に勝ってしまった。この「憎悪」をレフェリーである〈和田〉は瞬時に解読できなかったと思われる。

### おわりに

先述したように「プロレス」の再興は〔新日本プロレス〕によって牽引されている。リング上で「愛してまーす」と唱和し、「エア・ギター」を奏でる「チャラ男」の〈棚橋〉（棚橋、2014）に象徴されるように「プロレス」のエンターテインメント化は多様な客層の取り込みに成功した。’97年に設立されたインディーズ団体の〔DDT（Dramatic Dream Team）〕も「文化系プロレス」（高木、2008；「観客論に基づいた徹底的な作り込み」と「時代の一步先を行く斬新なセンス」）を標榜し、年に数回「両国国技館大会」を開催できるほどに成長した（週プロ、2015（9.9））。人形（＝「ヨシヒコ」）と〔DDT〕のスター選手〈飯伏幸太〉（’82年生～）とのチャンピ

オン戦など(週プロ, 2015 (4. 1) b), 数々の異種格闘技戦を発売した(猪木)でさえ想像し得ない領域だ。さらに, [DDT] よりも数年前に旗揚げした[大日本プロレス]('95年)も, 「デスマッチ(流血を伴う)」と「ストロングスタイル(マッチョな闘い)」という一見エンターテインメントと対極にある路線を重層的に展開しながら, '15年夏に(7月20日)「両国国技館大会」に辿り着いた(週プロ, 2015 (8. 5))。

ここで考察対象とした「事件」は, 上述したようなエンターテインメント化を核とした大きな流れの中で, [スターダム] が一定以上の技量を伴わない選手にそのような役割を負わせることの歪みの結果ともいえよう(加えて言えば, 団体の選手層の薄さを外国人レスラーの招聘や中学生の「キッズ・ファイター」によって補う方略も問題を孕んでいる)。〈棚橋〉や〈飯伏〉はそのエンターテインメント部分を除去しても明らかにかなりの技量をもつ選手なのである。〈世IV虎〉は身体的には十分な技量をもつと判断できよう。しかし, 「プロレス」的枠組みでその技量を発揮するための「冷静さ」の心理的機制が「世IV虎」には十分に育まれてなかった。

〈ロッシー〉は, 〈宝城〉対〈紫雷〉という「エロカワイ」系の軸に, 〈悪斗〉対〈世IV虎〉という「悪党」軸を交差させることによって[スターダム]の強化を企図した。しかしながら, 彼が描いた「アングル」が, ある意味「プロレス」の本質—一定の技量の上に成立するエンターテインメント—を甘く見たために, 瓦解したのである。これが, この「事件」の本質といえるのだろう。

わが国の女子プロレスの盛衰を民俗学的視点から捉えた亀井(2000)は, 最も隆盛を誇った[全日本女子プロレス]('68年~'05年)が「アイドル」を創出することによって若年の女性を観客として獲得した様を参与観察的に描いた。〈ロッシー〉は, 20年間にわたりその[全日本女子プロレス]のプロデューサー的役割を果たした人物なのだ。

退社する際に「この20年間に培った経験を生かして理想郷をつくり上げる」(ロッシー小川, 1997)という言葉がまさに[スターダム]として具現化するはずであった。しかし, 「女子プロレス」の現在の状況がベテラン選手を代表として多団体化・フリーランス化しているという状況(「男子プロレス」も同様の状況にある)が〈ロッシー〉に団体選手層の薄さという決定的問題を抱え込ませ, 多様な選手が所属していた[全日本女子プロレス]の隆盛に基礎をおく「理想郷」の実現を困難にしている。皮肉なことに, 〈ロッシー〉は, 「レスラーとし

てリングに上がるのなら, 心身ともに強固でなくてはならない」とか, 「入門からデビューまで早すぎるのも質を落とす原因」のように退社時に指摘した的確な問題点(ロッシー小川, 1997)へと今回の「事件」によって自己回帰してしまったのだ。

## 引用文献

- Barthes, R. *Mythologies* 1957 篠沢秀夫(訳)『神話作  
用』1967 現代思潮新社
- Goffman, E. 1959 *The presentation of self in everyday life.*  
Doubleday & Company Inc. 石黒毅(訳)『行為と演技  
—日常生活における自己呈示—』1974 誠信書房  
広く。2014『プ女子百景』小学館集英社プロダクション  
入不二基義 2009『足の裏に影はあるか? ないか?  
—哲学随想—』朝日出版社
- 泉井弘之介・山近義幸 2013『新卒プロレス—リングに  
就職した大学生たち—』ザメディアジョン・エデュケ  
ーションナル
- 亀井好恵 2000『女子プロレスの民俗誌—物語のはじま  
り—』雄山閣出版
- 岡村正史 1991 冬の京都の知的バトルロイヤル 岡村  
正史(編著)『日本プロレス学宣言』現代書館 17-26  
頁
- 塩澤幸登 2009『U. W. F. 戦士2—1987~1989年 新生  
U. W. F. 復活編』河出書房新社
- Thompson L. 〈リー・トンプソン〉1991 プロレスラー  
のフレーム分析 岡村正史(編著)『日本プロレス学  
宣言』現代書館 27-60 頁
- 諸井克英・坂上 舞・野島 彩・岡本有美子 2015 女  
子大学生における居場所感覚の基底にある心理学的機  
制の探索—過剰適応傾向, 抑うつ傾向, および自尊心  
との関連— 総合文化研究所紀要(同志社女子大学),  
32, 71-83.
- 高木三四郎 2008『俺たち文化系プロレス DDT』太田  
出版
- 棚橋弘至 2014『棚橋弘至はなぜ新日本プロレスを変え  
ることができたのか』飛鳥新社
- ロッシー小川 1997『衝撃ドキュメント 女子プロレス  
崩壊—危機一髪—』ぶんか社  
[週刊プロレス(週プロと略記)]  
2014 (12. 6) 2015 プロレスラー写真名鑑号 1767, 37.  
2015 (1. 21) 元ヤン女子, 天職に出会う 1773, 110-  
111.  
2015 (2. 4) 悪斗流エール 1776, 107-111.  
2015 (3. 11) a スターダムの悲劇 1781, 40-41.

〈安川悪斗〉の流血の彼方

- 2015 (3. 11) b なぜ、事件は起きたのか？ **1781**, 89-91.
- 2015 (3. 18) a 直接対決、先週号の表紙は是か非か **1782**, 12-15.
- 2015 (3. 18) b 世IV虎、事件について謝罪 **1782**, 17-19.
- 2015 (3. 25) a 紫雷イオの逸女でしょ！ **1783**, 38.
- 2015 (3. 25) b 世IV虎 vs 悪斗、私はこう見る〈長与千種〉 **1783**, 43.
- 2015 (4. 1) 世IV虎 vs 悪斗、私はこう見る〈和田京平〉 **1784**, 51.
- 2015 (4. 1) 検証 飯伏幸太 vs ヨシヒコ **1784**, 93-99.
- 2015 (4. 8) 世IV虎 vs 悪斗、私はこう見る〈里村明衣子〉 **1785**, 43.
- 2015 (4. 15) 世IV虎 vs 悪斗、私はこう見る〈高山善廣〉 **1786**, 43.
- 2015 (4. 22) 世IV虎 vs 悪斗、私はこう見る〈愛川ゆず季〉 **1787**, 51.
- 2015 (7. 1) 混乱の引退式 **1797**, 24-25.
- 2015 (7. 22) ありがとう、レインメーカー **1800**, 2-9.
- 2015 (8. 5) 尊き先導者 **1802**, 115-119.
- 2015 (9. 9) これが坂口征夫！ **1809**, 2-18.
- 2015 (10. 14) 安川悪斗、有言実行。汗と涙の復活祭！！ **1814**, 92.
- 2015 (12. 23) 告白-安川悪斗インタビュー **1825**, 101-103.

(2015年11月6日受理)